

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：34426

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H05386

研究課題名(和文) バングラデシュ経済成長下における若者の「移動」と文化形成

研究課題名(英文) Youth Migration and their Cultural Formation in the Era of Economic Growth in Bangladesh

研究代表者

南出 和余 (MINAMIDE, Kazuyo)

桃山学院大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：80456780

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,400,000円

研究成果の概要(和文)：1980年代後半以降の教育普及と著しい経済発展で注目されるバングラデシュでは、「教育第一世代」の若者たちを中心に、労働や高等教育の機会を求めた農村から都市への移動、さらに、教育や経済を資本とした階層移動を目指す動きが加速化している。本研究は、農村の若者、農村から都市へ移動する若者、都市部の大学生を対象に、彼らの空間移動と階層移動に着目し、「移動」を通じて形成するコミュニティ、そのなかで築く若者文化について考察した。第一世代の彼らにとっては、グローバル化の影響を強く受けた生活環境や情報と既存の価値との間で階層移動に至るには制限があるものの、彼らなりの価値観と生存戦略の試みを捉えることができた。

研究成果の概要(英文)：Since its birth in 1971, economic growth and education has been keen issue in Bangladesh. The large-scale education program began in 1980s and bringing children to school has been a challenge in rural areas. Due to lack of job opportunities in rural areas, “the first educated generation” began to look for jobs or higher education in urban city centers. Through education and jobs that leads to economic growth, people in rural areas moved from one class to another in their ladder of lives.

This study aimed at exploring social class mobility of rural people through higher education and often economic growth. Rural-urban migration and jobs are two means by which people in rural area move to upper social class. This study further looked at the life-style of migrated youths in urban city center. More specifically the study focused on their life strategies and how they negotiate those with traditional norms and values associated with these two phenomena.

研究分野：文化人類学

キーワード：若者研究 バングラデシュ 都市移動

1. 研究開始当初の背景

21世紀に入って以降、バングラデシュの経済成長率は年率6%を推移し、BRICsに続く「ネクスト11」の1つと目されている。とくに縫製業の輸出では中国に続く世界第2位となり、日本企業を含めて新たな投資先として海外からの関心を集めている。その背景には同国の若者を中心とした「低賃金で豊富な労働力」の存在が大きい。現在約1億6000万を超える人口のうち24歳以下が全体の約52%、15-24歳では18.8%と、青年層が約2割を占める若い国家である。

農村出身の若者の多くは、1980年代後半から本格化した初等教育普遍化の取り組みとともに成長した「教育第一世代」である。報告者は、本研究の対象となる農村出身の若者たちを、その子ども期(小学生時)から長期にわたって研究対象とし、彼らの成長過程を追跡してきた。そのなかで近年とくに顕著に見られるのが男子の都市出稼ぎである。幼少期において教育第一世代であった若者たちは、青年期にいたっても、国全体の経済成長と労働機会の増加、農村部における商品経済の浸透など、親世代とは大きく異なる環境のなかで成人し、新しい生活文化を模索している。都市への出稼ぎ移動は、経済需要に後押しされるものであると同時に、若者たちにとっては青年期特有の「ぶらぶらしている」時期からの回避かつ農村コミュニティからの離脱をも意図している。

一方、教育第一世代のなかにも高等教育の機会を求めて都市に移動する若者もいる。2000年代以降バングラデシュでは国立私立とも高等教育機関が急増し、従来のエリート層や新中間層に加えて、農村部出身の学生も少なくない。学歴形成の後に期待するのが、低賃金の非熟練労働より条件のよいホワイトカラー職であることは言うまでもない。そうした学生のなかには、親が土地を売却して子どもの教育に投資するといった動きも確認されている。

2. 研究の目的

本研究は、上記バングラデシュの教育第一世代の若者を対象に、若者たちの「空間移動」と「階層移動」に着目し、彼らが移動を通じて形成するコミュニティ、そのなかで築く若者文化について検討した。対象としたのは、

- 農村部の若者
- 農村から都市へ移動する若者
- 都市部の大学生

である。各対象が「移動」に要する資本と、彼らが形成する新たな文化を明らかにすることで、経済成長下の社会変容を若者の視点から論じることを目指した。

「社会の構造的変化を人間の営みに即して描き出す」試みは、人びとの生活戦略と展望から社会の将来像を見通すものとなり、人類学的若者論の可能性を提示しうる。

3. 研究の方法

本研究では現地調査をデータ収集の主な方法とした。研究目的で述べた、農村部の若者と農村から都市へ移動する若者については、報告者が2000年から継続して追っている農村出身の若者たちを中心として、彼らが農村および都市への移動先で築く新たなコミュニティをたどった。都市部大学生については、現地研究協力者(Md Siddiqur Rahman氏、Humayun Kabir氏)との連携を図りながら、首都ダッカ近郊のジャハングルノゴル大学(公立)に通う大学生および、マドラサ高等教育出身の若者を対象とした。各グループの若者たちの移動に関わる多様な資本と、彼ら彼女らが築くコミュニティとそのなかで共有される新たな文化(主に職への志向や友人関係)を検討するには、参与観察のなかで彼らとじっくり付き合いながら、内在化された価値を読み取る必要がある。報告者(研究代表者)と研究協力者はそれぞれに各グループの若者たちとのラポールを持っていたため、それが可能となった。

また、報告者がこれまでも研究対象としてきた、バングラデシュ北部ジャマルプール県の農村出身の若者たち(NGO運営の小学校で2003年に4年生に在籍していた16人)については、報告者撮影による映像記録があり、若者期についても継続して撮影した。さらに、本研究期間中に、子ども期から若者期までを含めて編集し、映像作品として発表した。

4. 研究成果

本研究は当初の目的を概ね達成できたが、本研究期間中の2016年7月に現地首都ダッカにおいてテロ事件が起き、日本人を含めた外国人犠牲者が出た。その後、外務省より渡航規制勧告が出され、現地においても特に外国人の行動規制がしかれた。そのため農村部に長期間滞在することができなかったため、農村部の若者については、報告者がすでに関係を築いていた若者たちへの聞き取り調査のみに留まり、他のグループに比べると手薄になったことは否めない。

しかし、テロ事件が現地若者の犯行であったことから、本研究テーマと深く関係するため、同世代の若者たちが当事件をどのように受け止めていたかを急ぎ追加調査した。

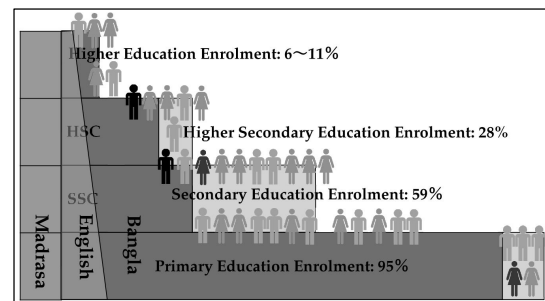


図1: バングラデシュ教育システムと就学率
 出典: バングラデシュ政府発行データと現地調査により筆者作成

(1) まずは、本研究が対象とする現代バングラデシュの若者の教育経験の現状を図1に示した。教育第一世代の若者たちは初等教育レベルにおいては大半が教育へのアクセスを得たものの、中等教育以降は決して普遍化のレベルには達していない。6割の子どもたちが中等教育に進学するものの、前期中等教育5年間を終えるのはその約半分で、後期中等教育に進学するのは3割に満たない。高等教育に至っては就学率6~11%とされている。

高等教育の大学間格差は極めて大きく、都市部の公立私立の大学(University)と、地方都市や農村部でNational Universityの被提携校として展開されるカレッジ(Honors/Degree College)はシステム的にも教育の質的にも大差がある。学生生活そのものにも大差がある。大学では、公立大学は多くの大学が学生寮を完備して学生たちは寮生活を送りながら授業に出る。また2000年前後から首都ダッカに急増する私立大学でも、寮は限られているものの、毎日授業が行われ、学生たちは大学中心の生活を送っている。

それに対してカレッジでは、とくに農村部に多いDegree Collegeでは授業はほとんど行われず、学生たちは試験を受けて学位をとることのみに集中する。National Universityの傘の下にあるため、カレッジの試験はすべてNational Universityで管理されている。このことは、大学教育という点においては限界となっているが、農村出身の教育第一世代の若者たちにとっては、仕事をしながら学歴を積むことを可能にしている。また、農村で暮らす女性たちは、教育を続けていたとしても中等教育終了時に結婚することが多いが、カレッジでの限られた通学は、彼女たちに結婚後も教育を続ける(試験のみ受験する)ことを可能にしている。6~11%の就学率にはそのような大学生も含まれている。

図1のシステム上に示している人マークは、報告者が調査対象の中心とした38人を示している。数の上では概ね全国統計と変わらないことが分かる。高等教育に関しては、進学した5人全員がカレッジへの進学で、大学(University)に進学した者はいない。

このことから、本研究の対象とした3つのグループのうち、とが国全体のマジョリティであって、は一部のエリート層であることが分かる。

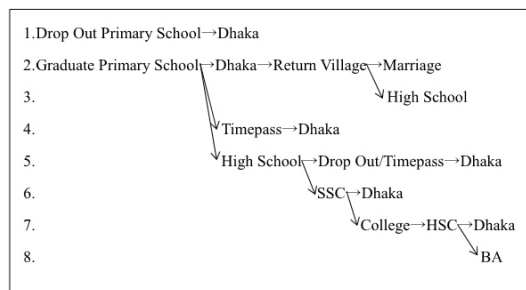


図2：男子農村出身者の教育からの労働移動
出典：現地調査により筆者作成

(2) 次に、教育経験から農村-都市移動への流れのパターンを図2に示した。

報告者の調査村からは、都市への労働移動はほぼ男性に限られており、女性が移住するケースは、貧困により農村での生活が維持できないため子ども期に親と共に移住したケースか、結婚後に都市部で働く夫と共に移住したケースに限られていた。

彼らの移動先での仕事はアパレル生産業がほぼ唯一である。冒頭で述べたように、縫製業は現在のバングラデシュの経済成長の主要産業であるが、縫製業への就職には学歴があまり意味をなさない。また教育第一世代の若者たちの親世代の大半は農業従事者であり、非農業分野への伝手がない場合が多い。労働者市場の縫製業は伝手や学歴がなくても就けるため、彼らにとってほぼ唯一のアクセス可能な仕事である。

若者たちが教育と都市労働移動の間のターニングポイントをどこに置くかは個々人に委ねられる。図2のパターンを見れば分かるように、中には一旦ダッカに働きに出たものの途中で教育に戻るケースもみられる。彼らはぶらぶらする時期(「タイムパス」)も含めて農村と都市の間を行ったりきたりする不安定な時期を過ごす。

このことは女性にもみられる。前述のように農村の女性たちは、中等教育を終える頃には大半が結婚するものの、結婚相手が都市で単身出稼ぎに出ている場合が少なくなく、彼女たちの「行ったり来たり」は嫁家と実家の間で繰り広げられる。

この若者期の不安定な状況は本研究の前段階として実施した科学研究(若手B)「現代バングラデシュの『教育第一世代』による『青年期の創出』と社会変容」において論じた。本研究ではこのデータをもとに、各対象の生活戦略および将来の展望について調査した。

(3)農村から都市へ移動する若者たちの「都市化」を検討するために、コアとした調査対象者の友人や近隣の仲間から芋づる式にケースを拾い集めたところ、以下のタイプが捉えられた。

- 1) 農村から単身出稼ぎに来ている未婚男性
- 2) 農村に妻を残して単身出稼ぎに来ている既婚男性
- 3) 都市部縫製工場で共働きして暮らす夫婦
- 4) 農村で結婚し都市部で核家族生活を築く夫婦(妻は専業主婦か家内職)

このうち、1と2の男性たちはメスと呼ばれる集合住居で各自が1部屋ないし2人で1部屋を借りて生活していた。食事には共同で近所の女性を雇っていることが多い。職場(工場)が同じ者同士のこととあれば職場は異なることもある。一方、3と4の核家族は、長屋風の集合住宅で、やはり一家に一部屋借りて生活している。台所とバスルームは共有のことが多い。単身者と家族の相違は、家具や日用品の量に明らかである。

報告者は、コアの調査対象者については彼らが農村から都市へと出稼ぎに出る時から把握しているが、年数を重ねるにつれて、都市部でのネットワークが築かれ、休日の過ごし方や帰省頻度に明らかな変化が見られた。また、出稼ぎ当初は親戚や同郷者を頼って都市に出てくることが多いが、その後は都市で知り合った友人からより条件の良い職場の情報を得るなどして工場間を異動する。昇給昇進システムが整っていない縫製工場の現状では、労働者市場のなかで工場を異動するのが唯一の昇給昇進方法である。この点において、単身出稼ぎの男性の方が身軽であるがゆえにモビリティは高い。

女性に関しては、共働きのケースは結婚前からダッカで働いていて、ダッカで知り合うか、あるいは同郷者で同様にダッカで働いている者同士が結婚して、婚姻後は同じ工場で働くというケースが見られた。また、妻は縫製業に従事し、夫はリキシャ引きをしているというケースも見られた。一方、農村で就労経験のないまま結婚した女性は、農村に残って夫が単身出稼ぎとなるか、一緒に都市に出てきて子どもを育てながら家で内職をするケースが見られた。

彼らに都市生活についての将来の展望を尋ねると、どの対象層も一様に、都市での生活は一時的だと考えていた。その背景には、縫製業での低賃金重労働は、マネージャーレベルにつかない限り、長期に渡って続けられる仕事ではないからである。ただ、都市で子育てを始めた世帯からは、子どもの教育は都市部のほうがよいという考えも聞かれ、子どもが成人するまでは都市での生活を続ける可能性が高い。彼らが都市市民となるか、ひいては階層移動をして都市新中間層となりうるかを既存の議論枠組みを用いて検討したが、第一世代には制限のほうが大きかった。

(4) 高等教育進学率は限られているものの、実数の上では急増しており、大学カレッジいずれにおいても、家族の中で初めての大学進学者であるという大学生は多い。

農村部のカレッジが、農村での生活や都市への出稼ぎと齟齬を生じないゆえに農村部で人気を集めていることはすでに述べたが、都市部に増える公立私立大学にも、農村出身の大学生が急増している。彼らが経験する「大学生活」は親世代にはイメージも付かない。都市部公立大学の大学生について、現地研究協力者の Siddiqur Rahman 氏の調査によると、大学で共有する情報やネットワーク（とくに学内学生サークルや学部先輩とのつながり）から、彼らは将来像を描く。それらの仕事はグローバル化の影響を強く受けた、民間セクター、IT系、さらに海外での大卒条件の仕事、である。

また、農村から出てきて寮生活をしている学生たちは、卒業後は都市に残るか村に帰るかの選択を迫られるが、村に帰っても仕事と

いえば学校の先生に就ければよい方である。女子の場合は親からの結婚のプレッシャーによって引き戻される者も少なくない。一方、親ともども都市で暮らす場合は卒業後も都市に居続けることになる。大学生たちは在学中に恋愛を経験することが多く、どちらかが都市居住者の場合には卒業後に結婚するケースもしばしば聞かれた。

つまり、ここでも第一世代は都市と農村の価値基準の間で引き合うが、親世代がすでに都市に移住している場合、第二世代は都市的関係のなかで暮らしていることが分かる。

(5) 女性たちの空間移動が増すことは、ムスリムがマジョリティを占めるバングラデシュにおいては女性の行動規範とも接触する。都市部の大学に通う女子学生たちも、農村部カレッジに通う女子学生たちも、多くがブルカをまとっている。ブルカを着る女性が増えたことが「イスラーム化」として論じられる説もあるが、報告者の見解では外出する女性の増加を示しているものと考えている。

都市部と農村部両方の大学生たちにブルカを着る理由を尋ねたところ、一義的には宗教規範が説明原理として用いられた。ブルカのメリットとデメリットを尋ねると、デメリットはあまりなく、メリットとして、セキュリティや利便性、またとくに農村部では個人認証を避けて行動できるという点も挙げられた。さらに、縫製工場で働く女性たちはブルカを着ていないことから、彼女たちとの差異化の側面も挙げられた。この社会的ステータスとしての位置づけは、ブルカやヒジャブがムスリムファッションとして流行していることともつながる。

このように、ブルカ着用実践には既存の価値観のなかで彼女らなりの戦略を見て取ることができる。

(6) バングラデシュの教育システムには大きく分けると、ベンガル語を教授言語とする学校、英語を教授言語とする学校、そしてマドラサがある。さらにマドラサには政府認可のアリアマドラサと無認可のコオミマドラサ（最近になって認可の動きがある）がある。現地研究協力者の Humayun Kabir 氏はコオミマドラサについての研究実績があり、本研究においてもマドラサ出身の若者たちの進路について、彼らの意見と実態に関する調査に協力してくれた。

マドラサ出身の学生たちにとって、そこで受けた教育は一義的には職につながる経済資本というよりも、アイデンティティにつながる文化資本の認識が大きい。そして、職に就くためにはコオミマドラサと並行してアリアマドラサやベンガル語教育とのダブル資格を取ることも少なくない。あるいは、イスラーム知識を用いて、私塾の講師をしたり、自らマドラサを開設したりする。また近年、イスラーム関連の専門出版社が増え、そうし

た出版事業を行うのも大半がマドラサ高等レベルで勉強した者である。

このように、マドラサ出身者たちは、マドラサでの教育を通してムスリムとしてのアイデンティティを明確に獲得し、現代社会のなかで生きていくために、それ以外の流れにも乗り、また「イスラーム文化」を市場に乗せるという戦略にも出ている。

(7) 以上のように、教育第一世代の若者たちは、明らかに前世代とは異なる若者期を経験しており、彼らが空間移動による階層移動を目指しているのは明らかであるが、第一世代にとってはネットワークや価値観の点において限界がある。しかし、都市と農村、またどの階層においてもそれぞれにグローバル化による影響が色濃く見られる。前述の、本研究期間中に起きたテロ事件を例にとってみても、若者たちを取り巻く情報と動きは「既存社会からの変化」ではとらえきれないくらい予測不可能なものであり、彼ら彼女ら自身もそれに翻弄されているところがある。

本研究はこうした状況を受けて、国際共同研究加速基金助成課題「現代バングラデシュの若者のアイデンティティポリティクスからみる社会変動」として発展させ、すでに着手している。本研究課題による研究成果と合わせて出版を目指している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計9件)

Minamide, Kazuyo, Seeking New Life in Bangladesh: Do rural migrating youth “urbanize” after moving to the city?, *Nrivijana Patrika* (Journal of Anthropology), 査読有, Vol. 23, 2018, Bangladesh, in printing.

Minamide, Kazuyo, Practical Education for Environmental Awareness: Education on the Arsenic Contamination Issue in Bangladesh, *Journal of Agroforestry and Environment*, 査読有, Vol. 11, No. 1&2, 2017, Bangladesh, pp.71-75.

南出和余、映像制作による対話的コミュニケーション—映像・人類学・教育—、コンタクトゾーン、査読有、9号、2017、pp.386-397.

南出和余、バングラデシュ海外出稼ぎ者の夢と葛藤 出稼ぎ先ギリシャと出身農村社会の狭間で、桃山学院大学総合研究所紀要、査読無、43巻第1号、2017、pp.55-71.

南出和余、グローバルとローカルの狭間で錯綜する「子ども」のイメージと実態、子ども社会研究、査読有、23号、2017、pp. 41-52.

Minamide, Kazuyo, The First Educated Generation as “Social Transformers” in Rural Bangladesh: An Overview from their Childhood to Adolescence in a Village of Jamalpur, *Nrivijana Patrika* (Journal of Anthropology), 査読有, Vol. 20, 2015,

Bangladesh, pp. 33-51.

南出和余、映像から読み解く若者の関心表現媒体としての映像制作教育の可能性、桃山学院大学総合研究所紀要、査読無、第40巻第3号、2015、pp.197-214.

Rahman, Siddiqur, Career Aspirations of Public University Students in Bangladesh in the Context of Globalization, *Nribigyan Patrika* (Journal of the Department of Anthropology), 査読有, Vol. 23, Dhaka, 2018, in printing.

Kabir, Humayun, Negotiating Careers within Faith and Identity: The Young Madrasa Educated Bangladeshis, *Journal of Education and Work*, 査読有, Vol. 31, London, 2018, under review.

〔学会発表〕(計17件)

Minamide, Kazuyo, What has disappeared and what has remained in the life stages in Bangladesh? Responding to Prof. Hara’s Fieldwork after 50 years, in the Panel of ‘Remembering Village after 50 Years: Reconsidering an Ethnography by the late Professor Tadahiko Hara,’ 5th International Congress of Bengal Studies, Jahangirnagar University, Dhaka, Bangladesh, 2018.

Minamide, Kazuyo, Rural-Urban Migration of Youth and their Seeking New Life in Bangladesh, in the Panel of ‘The Life Strategies of Young Generation in Contemporary Bangladesh,’ The 46th Annual Conference on South Asia, University of Wisconsin, USA, 2017.

Minamide, Kazuyo, Urban Migration of Youth under the Rapid Economic Growth and the Impact on Rural Depopulation: A Case of Japanese Village in 1960s, International Workshop on The Role of University in Promoting GNH through Practice and Rural Development, Sherubtse College, Bhutan, March 2017.

Minamide, Kazuyo, The Strategy of Wearing Veils by Young Women in Bangladesh, in the Panel of ‘Educational Experience and Gender in South Asia,’ International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, Dubrovnik, Croatia, 2016.

Minamide, Kazuyo, Disparity of Education between Rural and Urban in Bangladesh: From the Perspective of Students’ Life, in the Panel of ‘Education and Social Class,’ International Congress of Bengal Studies, Tokyo University of Foreign Studies, Japan, 2015.

Minamide, Kazuyo, Visualizing Invisible Reality through Ethnographic Film Making: A Film of “Papiya” a Girl’s Life in Rural Bangladesh, in the Panel of ‘The

Filmic Reality in Bengal: Production and Consumption of Meanings of the Cinema,' International Congress of Bengal Studies, Tokyo University of Foreign Studies, Japan, 2015.

南出和余、子どもは誰が守るのか? 「社会のなかの子ども」と「子どもから知る社会」の狭間、日本子ども社会学会第24回大会、ラウンドテーブル『子どものため』にどう挑むか 子ども社会研究の射程を広げる、東京学芸大学、2017。

南出和余、バングラデシュ経済成長における学歴形成がなす意味 縫製業に従事する「教育第一世代」の若者たちの事例から、東京大学大学院総合文化研究科附属グローバル地域研究機構南アジア研究センター設立記念シンポジウム「南アジアの社会経済発展の基盤-教育・市場・国家」、東京大学、2017。

南出和余、農村の若者の生活から見たテロ事件、ワークショップ「ダッカのテロ事件とバングラデシュの若者たち-その背景とこれからを考える」、東京外国語大学、2016。

南出和余、学校化される子ども若者の身体 バングラデシュ農村社会の「教育第一世代」の子どもたち、日本子ども社会学会第23回大会、テーマセッション「学校化される子ども・若者の身体 アジアの国々との比較から」、琉球大学、2016。

南出和余、教育第一世代 子ども期から若者期へ (映像上映)、日本文化人類学会第50回研究大会併設映像人類学上映会、南山大学、2016。

S. M. Shamrul Alam, Education for Whom? Pedagogy and Social Change, in the Panel of 'Education and Social Class,' International Congress of Bengal Studies, Tokyo University of Foreign Studies, Japan, 2015.

Siddiqur Rahman, Urban Social Class Mobility through Higher Education in Bangladesh in the Context of Globalization, in the Panel of 'Education and Social Class,' International Congress of Bengal Studies, Tokyo University of Foreign Studies, Japan, 2015.

Humayun Kabir, Cultural Sociology of Madrasa Education in Bangladesh: Perspectives on Class, Power, and Culture, in the Panel of 'Education and Social Class,' International Congress of Bengal Studies, Tokyo University of Foreign Studies, Japan, 2015.

Manabi Majumdar, The Idea and Practice of Schooling in Urban (West) Bengal: Through the Lens of Social Justice, in the Panel of 'Education and Social Class,' International Congress of Bengal Studies, Tokyo University of Foreign Studies, Japan, 2015.

Siddiqur Rahman, Economic Globalization and Career Aspirations of Public University Graduates in Bangladesh, in the Panel of 'The Life Strategies of Young Generation in Contemporary Bangladesh,' The 46th Annual Conference on South Asia, University of Wisconsin, USA, 2017.

Humayun Kabir, Negotiating Careers within Faith and Identity: Madrasa Educated Young Bangladeshis, in the Panel of 'The Life Strategies of Young Generation in Contemporary Bangladesh,' The 46th Annual Conference on South Asia, University of Wisconsin, USA, 2017.

〔図書〕(計4件)

南出和余、バングラデシュ女子の高学歴化と「女子大生」の挑戦、粟屋利江、井上貴子編、インド ジェンダー研究ハンドブック、東京外国語大学出版会、2018、pp.137-141.

南出和余、貧困世帯の生活 農村から都市へ、経済発展を根底から支える若者たち、大橋正明他編、バングラデシュを知るための66章〔第3版〕、明石書店、2017、pp.335-339.

押川文字、南出和余編著、「学校化」に向かう南アジア 教育と社会変容、昭和堂、2016、399頁。

南出和余、バングラデシュの若者が担う経済発展、竹歳一紀、大島一二編、アジア共同体の構築をめぐる アジアにおける協力と交流の可能性、芦書房、2015、pp.127-143.

〔その他〕

(1) 映像作品

南出和余、教育第一世代 子ども期から若者期へ、英語版: The First Educated Generation、52分 DV/HDV、2016。

(2) 書評

南出和余、長田華子『バングラデシュの工業化とジェンダー-日経縫製企業の国際移転』、アジア経済、56巻2号、2015、pp.126-129.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

南出 和余 (MINAMIDE, Kazuyo)

桃山学院大学・国際教養学部・准教授

研究者番号: 80456780

(4) 研究協力者

シディクル・ラフマン (Siddiqur Rahman)

フマユン・コビル (Humayun Kabir)

サムスル・アロム (S. M. Shamrul Alam)

マナビ・マジュンダール (Manabi Majumdar)